

テラヘルツテクノロジーフォーラム通信

Vol.14、 No.1

巻 頭 言

テラヘルツテクノロジーフォーラム 会長 谷正彦

2015年度はフォーラムの役員構成に少なからず変更がありました。会長は谷が務め、副会長として亀井淳史氏、((株)テクノバ社長)、大谷知行氏(理化学研究所グループディレクター)に新たに着任いただきました。新理事として寶迫巖氏、(NICT 所長)、今村元規氏((株)アドバンテスト事業部長)、大竹秀幸氏(アイシン精機(株))の3名、研究交流委員長として永井正也氏、(大阪大学准教授)、戦略企画委員長として齋藤伸吾氏を迎えた新体制でその運営に臨みました。

2015年度は体制整備とともに、日本学術振興会テラヘルツ波科学技術と産業開拓第182委員会との共催によりFTT 2015(The Second International Symposium on Frontiers in THz Technology、8月30日~9月2日、アクトシティ浜松)の開催に注力しました。FTT2015は組織委員長の廣本先生のリーダーシップのもと、多くの方々の協力を得て、盛況のうちに終えることができました(詳細はテラテク通信 Vol.13, No.2の開催報告あるいは、フォーラムのWebページ「フォーラム活動報告」<http://www.terahertzjapan.com/report.html>に掲載のFTT 2015の開催報告を参照ください)。この場を借りて、ご協力いただいた方々に感謝申し上げます。

さて、FTT 2015やその他の最近のテラヘルツ波関連の学会に出席して感じたことは、高強度テラヘルツ波を利用した物質の非線形応答の研究、テラヘルツ帯のメタマテリアル科学やグラフェンなど新規物質を利用したテラヘルツデバイスの開発などが非常に活発になってきていることです。これらの研究はテラヘルツ波の光源、検出器技術の進歩と、グラフェンに代表されるような新材料、新機能性材料開発に支えられており、今後もこの傾向は続くのではないかと思います。一方、産業利用を目指した応用開発という面では、ニッチな応用はさまざまに提案されていますが、いわゆるキラーアプリケーションと言えるものがまだ現れておらず、フォーラムとしても、実用化に至るまでの各種課題の解決、シーズ発掘、テラヘルツ波技術のシステム化などにこれまで以上に取り組む必要があると考えます。

昨年度のもう一つの話は、テラヘルツシステム応用推進協議会(2015年9月29日設立、会長:東京工業大学 安藤真 理事・副学長(研究担当))が発足したことです。この協議会は、テラヘルツ技術をもとにしたシステム開発の促進、社会展開・産業化の早期実現を目指し、関連する機関の連携を深めながら、課題検討・政策提案、普及啓発活動、動向調査、標準化活動等を通じて、テラヘルツシステムの普及に資することを目的としています。フォーラムも共催して、その設立記念講演会が2015年3月30日に一橋講堂にて執り行われました。フォーラムの目指す、新産業創出に向けた取り組みと重なる部分が多く、いわば兄弟団体と言ってもよいと思いますが、フォーラムがどちらかというと計測技術などの基盤技術の開発とその普及に重点を置いてきたのに対して、協議会ではテラヘルツ波技術のシステム化、特に通信応用に力点を置いた取り組みが行われるのではないかと思います。フォーラムと協議会は互いに補完、連携し、テラヘルツ技術の社会実装、産業化を進めていくことが期待されます。

最後に、テラテク通信 Vol.13, No.1でも触れたIRMMW-THz2018ですが、昨年8月下旬に香港で開催された国際組織委員会(IOC)で日本での開催が正式決定されました。会場は富山国際会議場、会期は2018年9月下旬を予定しています。今年4月には開催地組織委員会(Local Organizing Committee, LOC)が発足し、福井大学遠赤外領域センターの出原敏孝先生と谷がLOCのCo-Chairを務めることになりました。テラヘルツテクノロジーフォーラムとしては、開催準備期間も含め、全面的な支援を行う予定です。改めて会員の皆様のご協力、ご支援をお願いする次第です。